

第15回 (1998年夏期)

# バングラデシュ

## 寺子屋訪問ツアー報告書



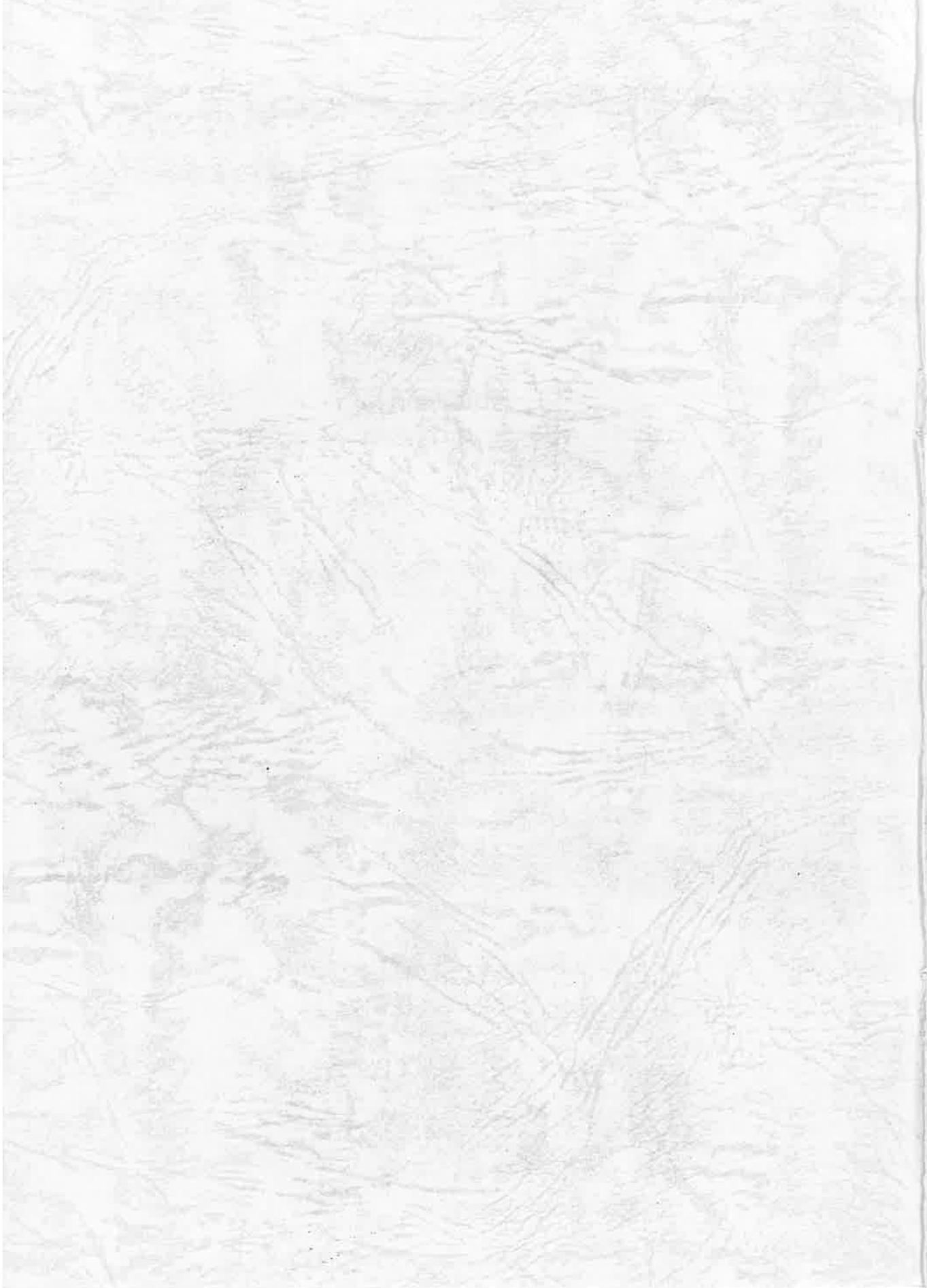
アジアキリスト教教育基金

〒169 東京都新宿区西早稲田2-3-18-26

TEL. & FAX. 03-3208-1925



エイセフ The Asia Christian Education Fund





## 隣人に涙する

船橋 良隆

98年夏のスタディー・ツアーは、大洪水の最中でしたが、SEPスタッフの方々のご好意により、すばらしい成果をあげ得たことを心から感謝したいと思います。

今回のツアーで、特に私の心に残った事のひとつに、全体シェアリングの際 ある方がこんな質問をしたことがあります。

「あの物乞いをしている子どもたちにも、神様の愛は注がれているのでしょうか。不平等ではないですか。」

私は、この問いを聞いて過去2回、同じような質問を受けたことを思い出しました。一度目は、数年前、ジャマルプールへ行った時、当時大学一年生であったRさんが、夜のシェアリングの後で「もし神が愛であるというのなら、なぜ、こんなに貧困で苦しんでいる人、子どもたちがいるのですか。」と、おいおい泣きながら訴えたのです。

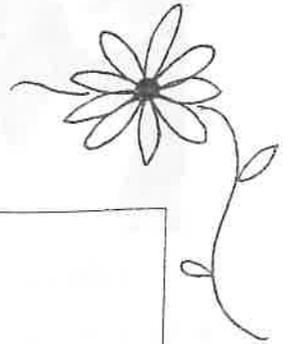
また、M子さんは、卒論の資料を集めるためダッカに行き、その時、お手伝いをしてくれたダッカ大学女子学生について、こう話してくれました。「彼女は私より、はるかに優秀なんです。その彼女が経済的理由で進学できず、たまたま私は日本に生まれたというだけで、外国に留学できる。全く不合理ではないでしょうか。」M子さんも目に一杯の涙を溜めて私に訴えかけました。

なぜ、こういうことが起こるのか。それは、わかりません。なぜ、愛の神がこのようなことを許されるのか、それもわかりません。

しかし、ただひとつ、確かなことがあります。それは、この二人のように「隣人の不幸に涙する感性が尊い」ということです。この二人は、今、具体的にバングラデシュの人々と共に生きようとしています。

無感動が流行っている今、ACEFのスタディー・ツアーでは、このような感性を生み出すようになりたいと願っています。

## 全体の日程



8月22日  
Saturday

バングラデシュ到着

8月23日  
Sunday

school 訪問  
教会

8月24日  
Monday

school 訪問  
Arong で買い物

8月25日  
Tuesday

A team Jamalpur へ  
B.C team Pubail へ

2週間

それぞれ各農村で生活する

9月1日  
Tuesday

ダッカに戻る

9月2日  
Wednesday

最後の sharing  
美術館へ行く

9月3日  
Thursday

New Market に行く  
SEP の子供たちによる Culture Show

9月4日  
Friday

ダッカ出発



# A team in ジャマルプール

## メンバー

- 船戸 良隆 先生
- 矢沢 励太
- 藤田 ひろ美
- 高橋 絵美
- 鈴木 桃子
- 植村 明子
- 谷口 聡美
- 高崎 哲

## SEPのスタッフ

- ハモント
- ショフィーク (オーガナイザー)
- モフレス (スーパーバイザー)
- バセツト ( )
- カン ( )
- モタレプ (office worker)

## スケジュール

- 8/25 (火) ジャマルプール到着
- 26 (水) ノルクリ school 訪問
- 27 (木) モホン school 訪問
- 28 (金) (boat trip  
サリーを着せてもらう)
- 29 (土) (ボイタマリセンター訪問 ~ バナナの木のいかだに乗って行く ~  
チャンプール訪問)
- 30 (日) (マイメイシン・バプテスト教会へ  
「テ・ゼ・ブラザーズ」の修道院にて  
ディスカッション・メデイテ・ション (瞑想))
- 31 (月) (ジョカ school (センター) 訪問  
母親識字学級訪問  
日本食を作り、SEPのスタッフ達と一緒に夕食)
- 9/1 (火) ダッカへ

একটিই কথা আজ বাথনাতে বুক আর মুখ বলে এক সাথে যে হলো বন্ধু ও বন্ধু আমরা, কে গীলব কে আবার যে জানি না জাতির বিগের করা যে জানে না যে হলো বন্ধু ও বন্ধু আমরা কোন ঠিন জাতি আনা বন্ধু তোমাই রয়ে খাব টির ঠিন এক কুসমাথ.  
রক্তের বন্দনাম তুজে যে গাই রক্তের বেগিন  
রক্তে পেজে বাতে, হুমি যে বন্ধু ও বন্ধু আমরা  
একটিই কথা আজ বাথনাতে বুক আর মুখ বলে এক সাথে যে হলো বন্ধু ও বন্ধু আমরা বন্ধু আমরা

সাইফ

# 農村での生活

8月25日(火)

ジャマルプールに到着。  
滞在先へ行く途中、竹の棒を  
持った人々に囲まれ、怖い思いを  
したが、無事に着くことができた。

8月26日(水)

今日から尻カ太さんの  
指導のもと、ラジオ体操が始  
まった。リキシャに乗って/ルクリ  
school の子供たちからたくさんの  
お花で歓迎される。

8月27日(木)

学校までぬかるんでいる道を  
歩いた。悪戦苦闘している私達を  
尻目に、子供たちは裸足で駆け  
抜けていった。さすが!!

8月28日(金)

イスラム教の国、バングラデ  
シュは今日は休日。午前中は  
boat trip、午後には、サリー&  
メンディーをしてもらう。みんな別人  
のようになっていた。

8月29日(土)

バナナの木のかたに乗りて学校へ。  
夕方から激しい雷雨に見舞われる。  
突然尻カ太さんの絶叫! なんと雷に  
打たれてしまった!! バングラの土には  
らびくよかった。

8月30日(日)

「テゼ・ブラザーズ」の修道院にて、  
司祭とディスカッションを行う。とても  
有意義な時間を持つことができた。  
昨日からの雨で田んぼの水位が上昇し  
ている。雨がやむことを願う。

8月31日(月)

お世話になったスタッフや、キッチン  
ママのために、みんなが日本食を作る。  
かなり好評だったが、わかめだけはダメ  
らしい。何故と聞いても言葉に「ゴッソリ」  
とても不思議。

9月1日(火)

今日はジャマルプール最後の日。  
最後にSEPスタッフとディスカッ  
ションをする。名残りを惜しみつつ、  
ダッカへと向かう。





## 「花の香りを嗅いだ人たち」

矢澤 励太

目を閉じると今でも寺子屋や村で出会った子どもたち、テーゼ修道院で語り合った修道士さんとあの黙想の時間、毎晩熱いディスカッションの時を持った仲間たち、そしていつも希望と笑顔を忘れないSEPの方たちのことが次々と頭に浮かんできます。バングラデシュに生きる人々が、援助づけになって自分たちでは何もできないでいるわけでは決してなく、自らの手でこの国を基礎からつくりあげていこうとする固い決意を持った人々に励まされ、導かれていることを、今回のツアーは教えてくれました。

かつてACEFのセミナーに講師として招かれた粕谷甲一神父がなさったお話を思い出します。スペインに伝わる「花の好きな子牛」という童話です。花の香りを嗅いで毎日を過ごしていた子牛フェルジナンドはひよんなことからマドリッドでの闘牛大会に引っ張り出されます。ところが試合の開始と同時に客席の婦人たちが投げた花が目の前に落ち、その香りの前にフェルジナンドはへなへたと座り込んでしまいます。結局彼はもとの田舎に戻されて、花の香りを嗅ぎながら幸せに暮らした、という物語です。粕谷神父によれば、自己中心性から解放されて人のために生きる喜びを知った人たちは、闘牛場のようなこの世にあって、他の人たちが嗅いでいるのとは違う香り、あの花の香りを知っているのです（ACEF COMMUNICATION no.12 参照）。

バングラの子どものために今日も働くSEPの方々、またACEFを通してその働きを共に担おうとする日本の人々は、この「花の香り」を知っているのではないのでしょうか。このツアーはそのような香りを嗅ぎながら生きている人々との出会いに満ちており、同時に私たちもそのような生き方へと招かれていることを教えてくれます。粕谷神父はスタディ・ツアーの感想を語ってくれた若者たちに、今から3、4年後に君たちがどう生きているかが分かれ目だとおっしゃいました（同上）。これから先私たちがバングラでの経験を単なる良い思い出として頭の中の引き出しにしまい、それと切り離された元の生活に戻っているのか、それともバングラの子どもたちに代表される私たちの「隣人」に、日本の中でも世界のどこかででも仕える生き方をしているのか。私たちには大きな宿題が与えられているような気がします。

異なるものを越えるのは何だったのか？

藤田ひろ美

人と人、組織と組織、国と国、文化と文化、宗教と宗教、その対立しているかのように見えるものを越えるものが存在する事を私は昨年のスウェーデンツアーで経験した。しかし、それがなんであるのか、はっきりと実感する事はなかった。むしろ、越えるものが存在するという事は現実ではあるが、現実から離れた事のようにも思えた。イスラム国家でのキリスト教精神に基づいたSEPの活動が人々に浸透していく。それは、はっきりとした言葉で私が語る事はできないが、(語る事は許されないかもしれないが)やはり、神が存在するのではないかと思うほどのものであった。私はあの土地からいろんなものを学び、短い滞在ではあったが、多くのものを共有した。

しかし、いつの日かその経験が遠いことのように感じてしまった。あの現実には私という人間から離れて存在する、言い切ってしまうえば別世界の事であるとすら思ってしまう。共に他者と本質の部分で無関係に生きているという事実を認識せざるを得ない事となった。それと同時にそれを認識した事で、あの経験を見て見ぬふりをしたくもなければそうもできない事も感じていた。この矛盾をどう考えるかというときに先に挙げた異なるものを越えるものは何かという問いを明確に意識できていなかったのである。

再びあの土地を訪れた。動いていた。同じ学校を訪問すると、昨年出会ったSEPの生徒がまたそこにいた。確実に動いているのだと。

私は学生で社会の中ではいわばモラトリアムとも呼べる時期を生きていて、居心地のよいところにいる。大きな衝突にあつや事もないだろう。しかし、探っている。その取組自体が、目的を果たし、理想に近づくのではないかと思う。他者の心に本質的な部分で関わる。自分という安住しているところから動きだすことだと。

異なるものを越えるものがあるのならば、何よりもそれは、個人個人の安住というところから動きだし取り組む事ではないかと私は考えている。



## 2 度目のバングラデシュ

高橋 絵美



今回のスタディーツアー参加は2年ぶり2回目であった。参加申し込みを決意する時からツアー中も“なぜ2回もバングラデシュに行くのか”“2度目のバングラデシュで何をしたいのか”“何をしにバングラデシュに来たのか”と言う問題が常に頭の中にあった。

今回のツアーに参加しようと思ったとき、私の中には“2年前には気がつかなかった事、感じ取れなかった事を感じ取ってこよう”“2年間でバングラデシュはどのように変化したのだろうか”ということが参加目的としてあった。2年前のスタディーツアーでは自分の無力さ、小ささを痛感し、その後自分なりに考えをまとめたつもりであった。実際、1回目のツアー後の私はその前に比べいろいろなことに関心を示し、物事や人間に対して積極的になれた。2年間で私も変わったはず、2年前とは違う私はバングラデシュをどのように捉えるのかということにも興味があった。

今回のツアーは1回目とはだいぶ違ったものになった。バングラデシュを、そしてACEFとSEPを冷静にいろいろな角度から見る事が出来た。SEPの活動の継続の重要性は、2年前のツアーの学校訪問で出会った女の子に同じ学校で今回も出会えたことで実感し、ACEFとSEPの関係については実際にスタッフやチームメンバーと話し合うことでどうあるべきなのかを考えさせられた。

バングラデシュの子供たちにとってバングラデシュを年2回訪れる私達の存在はとても大きなものに違いない。しかし、私達にとってもそれと同じ位大きなものであるはずである。今回のツアーでも1回目とは違うが1回目と同じ位の大きなものを与えられた。それをどう生かすかがこれからの私の課題である。バングラデシュの子供たちの笑顔を忘れずに小さなことから始めていきたいと思う。

## 未知の世界バングラデシュ

鈴木 桃子



バングラデシュの社会は私の想像を超えているものであり、実は、2週間バングラデシュの地でバングラデシュの人々と共にすごしても自分がこの社会にいるという実感が湧きませんでした。

ある友達がバングラデシュの悲惨の光景を見て「神様はすべての人を平等に愛していると言われたが、ここの人々達は私たちと同じように愛されているとは思えない。」と泣きながらみんなに訴えました。私も彼女と同じ気持ちでした。しかし、ある人が「それは単に神様に責任を押し付けているだけで、私たち人間が共に協力し合って助け合う事を望んでいるのではないか」と言ったことに考えさせられました。私たちは様々な選択をしながら自分の人生を創っていきます。しかし、バングラデシュの人々は選択する余地がないのです。自分の人生を選べるような人は少ないのです。今回の体験を通して、人には選択する権利は平等に与えられるべきだと強く思いました。そのためには私たちができる事は僅かかもしれませんが、これから自分のできる限りの中で努力をすべきであると思いました。

このツアーはたった2週間でしたが、ここには書ききれないほどの大きな経験をしました。多くのことを感じ、知り、考えました。貧しさの中で神の愛も多く感じました。私の人生の中で本当に貴重な体験の一つになりました。今回このような素晴らしい時を与えてくれたことまた、今自分が生きていることを神様に感謝しています。

先日、ボランティアについて考える時が与えられた。その時、ボランティアとは次のように定義された。自発性がある。(行為者が主体的に行っている活動)他者との関係が成立している。

(対等な関係)社会的自己実現をとげている。つまり、ボランティアとは、自由な時にやりたいただけやればいいのではなく、他者の行為を無視した行為であってもならないのだ。それは常に責任を伴うものであり、他者との関係性の中に成り立つものといえる。



また、responsibility (責任・信頼) とは response (応答) と ability (能力) から成ることばであり、他者の往信に対して返信する能力であるといえる。つまりボランティアとは、自分勝手に自分の欲望を満たすものでも、友人や知人の義理で行うものでもなく、他者の助けを求める呼び掛けに応じて、自発的に行う人であるということができるのだ。

そしてまさに CO-WORKER という関係はこの考え方に通ずるものであり、ACEF が目指す「共に生きる」という姿勢がいかに大切なことであるかが分かる。真に相手との交わりがあるといえるのは、そこに対等な関係がある時に限られる。そして、そのとき初めてボランティア側の「学び」「気づき」に伴う「自己の成長」がなされるわけだ。つまりこれが「社会的自己実現」であり、現在ボランティアに携わる若者の多くが「社会貢献」と並んで、ボランティア活動に望み、期待することなのである。このスタディツアーが「自分探しの旅」という傾向が強くなってきていると言われているのも、こうしたことを背景としているのではないだろうか。

対等な関係においては、助けること・助けられること、与える人・与えられる人の区別がなくなり、共に弱者同志として、助け合うことの重要性を認識するとともに、自分の弱さや醜さに向き合うことにもなる。その一方で、学力以外の面で自分を試す場を求めている若者たちは、ボランティアを通して、自己責任というものを痛感するとともに、自分が社会の一員であることを認識する。そしてこのことは、秩序と序列の世界、つまり学校という組織の中におかれている若者に、対等な関係性における「自分の居場所」を提供してくれるのだ。しかし、ボランティアとはあくまでも自分のために行う行為であってはならないのだ。自己満足で終わってしまったり、ましてや相手を自分が成長するための踏み台にしてはならない。常に自分の行動が他者にどんな影響を与えるのかを考えつつ、他者のために自分をフルに生かしていかなければならないのだ。

総じて言えば、ボランティア活動による「社会的自己実現」とは「市民性の獲得」であり、つまりは「成人」になるということにつながっていくのではないだろうか。そして「成人」になるということとは、社会的責任を負うということであり、応答能力を身につけるということになる。それは、一見自分に責任がないようなことを引き受けることであり、他者の要求や願いを自分のこととして受けとめ、それに応えていくことではないだろうか。環境問題も災害も、そしてバングラデシュという国の行く末も、自分には全く関係のないことだという人もいるかもしれない。しかしそれらと出会い、向き合うという偶発的な事柄を、必然的なこととらえ、自分に引き寄せ、共に考えつづけていくことが大切なのではないだろうか。この偶発性から必然性への転換に、神の導きを感じるか否かは個人の自由である。しかし、今回のスタディツアーにおいてはそれを強く感じる瞬間が少なからずあったように私は思う。共に考え、共に笑い、共に祈る。神のもとでは宗教をも越えた対等な結び付きが存在するということが末筆ながら記しておきたい。

私がスタディー・ツアーに参加した大きな目的は、「自分探し」のためである。何に対しても無気力で、ただなんとなく生活していた私は、いつも心にしこりのようなものがあるのを感じていた。しかし、バングラディッシュの人々と触れ合ううちに、徐々にそのしこりはほぐされていった。もちろん、始めのうちは、どのように人々に接したらいいのかわからず、特に最初の学校訪問で、突然たくさんの子供達の中に一人で入れさせられた時は、困ってしまった。だけど、そんな状態の私に一生懸命に話しかけてくる子供達の真剣でやさしい目をみていたら、だんだん彼らと触れ合うことに喜びを感じ、今まで忘れていた、言葉では言い表せないようなものを自分の中に感じる事ができた。また、バングラディッシュの人々のとても素敵な笑顔を見ているうちに、自分も自然にいい笑顔になっているのに驚いた。本当にたくさんものを彼らからもらったように思う。また、シェアリングの中でも多くのことを学んだと思う。みんな、さまざまなことについて真剣に考えていて、いかに自分がなにも考えずに過ごして来たかがよくわかって、恥ずかしく思った。今、日本に帰って来て、なにをしたらいいのか、はっきりとは分かっていないけど、バングラディッシュの人々からもらったものや、自分が感じた取ったものを忘れずに、なにに対しても、一生懸命に取り組んでいこうと思う。



## 感じ取るという事

高崎 哲

バングラの風を感じたい、あの何とも言えないにおいもう一度感じたい、ととても楽しみにしていたんだ。でもバングラで過ごした2週間は楽しいことばかりではなく辛いことの方が沢山あったんだ。でも辛いことがあっただけ色々な事を感じ、考える事が出来たんだ。

初めてツアーに参加した人達が沢山のことを感じとっているのに僕は何も感じていなくて、あせって何かを感じとろうとすればするほど自分の中の歯車が噛み合わなく気持ちだけが空回りしていた。そんな時バングラのゆったりとした時間の流れに身を任せたら、1回目、2回目では感じる事の出来なかった言葉では説明できない何かを感じる事が出来たんだ。今でも洪水の被害で苦しんでいる人がいることを思いこれからの生活をしていきたい。



愛知のアイドルとその親衛隊のメンバー

# B・Cチーム in PUBAIL

8月25日

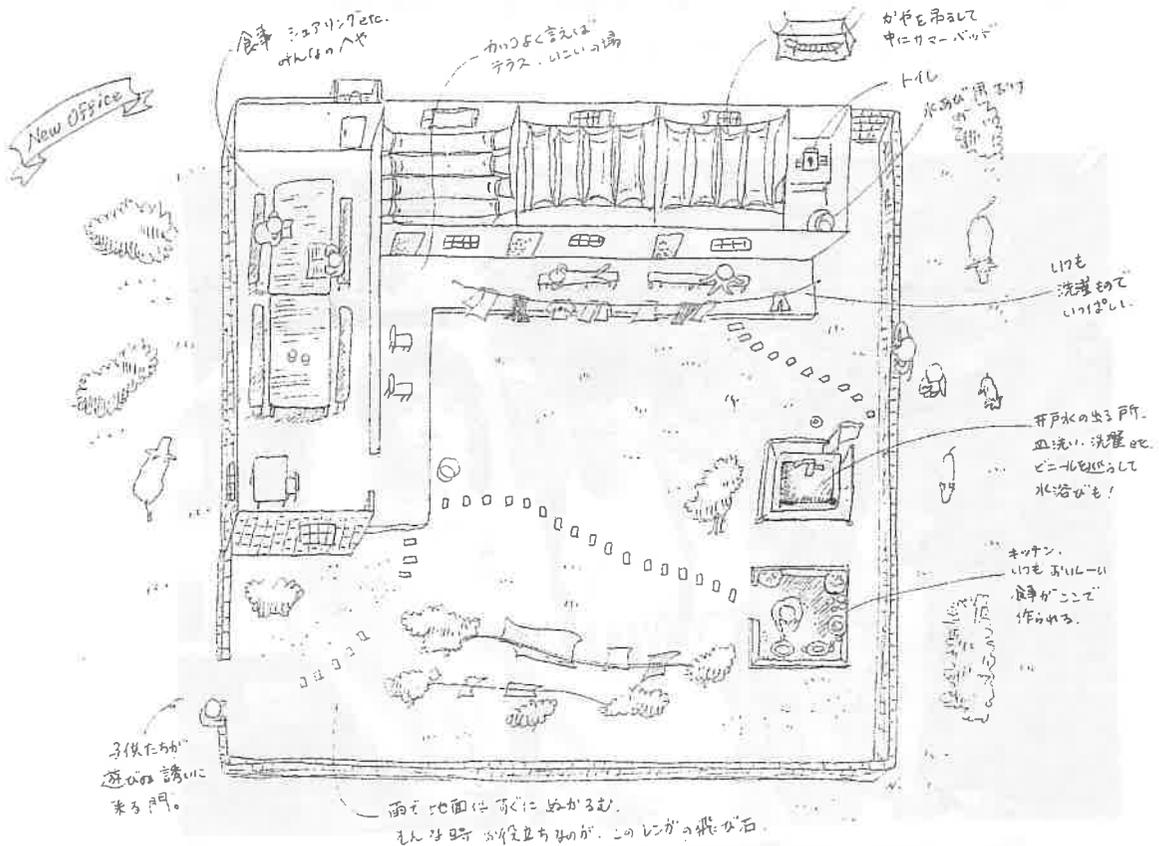
AM9:00 カタゲスタウス出発 2台の車にて農村へ

車中のBチーム-寺子屋で歌う歌の練習…  
Cチーム-景色を見たり、お喋りしたり…

AM11:00 車が止まった。ようやく農村に到着かと思いきや、なんと道が水浸しで先に進めないのだ。SEPのスタッフがズボンの裾を捲り、車から降りる。水位を足で測る。戻ってきてゆっくりと車を進める。何度もそれを繰り返す。私達日本からのメンバーは、ただ車中から見守るしかなかった。

AM11:30 ニュオイスに到着！この夏に使い始めたばかりの建物は、まだペンキも塗られていない未完成なものだ。スタッフが設計した、まさに我が家といった感じ。歓迎の意を込めて張られていた赤いテープ。儀子さんがテープカットをして、農村生活がスタートした。

午後 SEPスタッフと甘いお茶を囲んでの顔合わせ。オイスの塀のあちこちから、近所の子供や大人の興味津津な顔が覗き始める。私達も彼等に興味津津。「はじめは私達日本人を遠巻きに見ていた子供達も、いつのまにか泥だらけになって一緒にサッカーボールを追いかけていた。この時、言葉が通じないことの不安が消えていくのを感じた。」-裕美



8月26日

午前  
午後

チームごとの寺子屋訪問 B-ボッシュガオンスクール C-チャムツァスクール (各チームのページ参照)  
SEPの先生方が来訪。女性のメンバーにサリを着せてくれた。華やかで、ソフトな布に包まれて、みんな美しいバンガルーに変身!思わず男性陣もうっとり!その後掌にメンデーを施してもらう。それぞれ異なるデザインの花や太陽などが描かれた。草の染色力と先生の技にびっくりだ。

「授業の時には大人の顔で、打解けにくかった先生達。メンデーをやってくれている時は、やっぱり同じ年齢の女の子の顔で、どこの国でも変わらないんだなって、うれしかった。」-加菜

8月27日

午前

今日は洪水の影響で寺子屋訪問は中止。近くのマーケットを見学。雑貨屋、肉屋、床屋に服屋、どこも簡単に小さな作りのお店だ。あちこちを覗いて回る。フリヤサワカミズを購入。その後は思い思いに過ごす。

「ワイスの庭で、お昼のための鶏を殺して捌くのを見た。食事を残さず食べることは本当に大事。私達はいろいろな命をもらって生きてるから。」-華奈

午後

SEPの先生方来訪。お茶を囲み、一緒に歌を歌ったり簡単な遊びをする。なごやかな一時。だがもう少し突っ込んで、色々な話ができたらと思った。それにはお互いにコミュニケーションの手段としての英語に磨きをかけねば…。

「アメルさんと森へ散歩に行った。レモンの樹の葉の匂いをかいだり、バンガルーの歌と一緒に歌ったり。途中で町の人の写真を撮った。皆、日本では見れないようなすごくいい笑顔をする。」-厚志

8月28日

午前  
午後

船で、洪水の被害を受けた地区を訪れた。(洪水についてのページ参照)

思い思いの昼下がり。近所の先生のお宅訪問組は…さてどうなった?

「スタッフに連れられてバビ家へ。バンガルー流メーク講義の始まり始まり。数分後、麻子は桃のお菓子、華奈は熱帯魚、私はヒントウの神様(or 悪役!?)に、シントウールに変身!!!」-亜希子

バンガルーの艶やかな文化を身を持って体験した3人を、ワイスで迎えたのはブラッシュの嵐。すごかった…。(何がって?そりゃあ…)

2チーム合同ならでの、有志による昼のシェアリングも発生。

「ALBERT や他のメンバーとクリスチャンのあり方について話した。いつも神の側にいること、それは教会に行くだけでなく、ちょっとした時間に感謝の気持ちを持つことでもあった。時間に追われてしまう日本での生活について考えさせられた。」-美登利

今回は宗教について考えるムード大。「毎日の朝夕の礼拝をやっていると心が清められるのを感じる。とても大切な時間。私にとってキリスト教の存在が大きなものであることを知った。」-契子

8月29日

午前

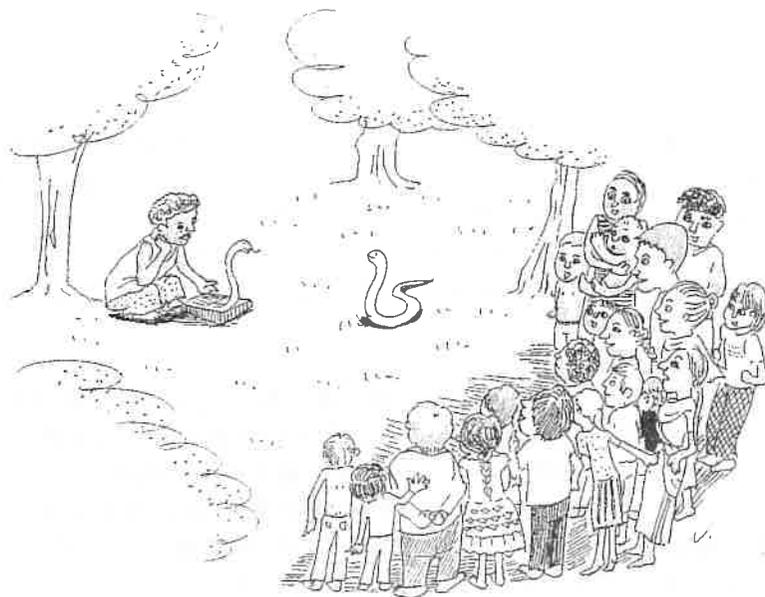
BC 合同訪問 乗合バスにて、プーバイルスクールへ

道に水が残っていて、長靴で歩くのも大変。裸足の子供達は器用に歩く。

「僕が参加したクラスには5人しか生徒がいなかった。3日前の訪問校では、もっと来ていたのに。未だに洪水の被害が拡大していることを痛感した。」一茂史

午後

ヘビ使いが来た！近所の子供・大人・キッチンのおばさん達、SEPのスタッフ、私達、みんなの歓声が、ヘビの動きにあわせてワイスの庭に響く。



8月30日

午前

カトリックの教会へ礼拝に行く。土壁の小さな教会には、たくさんの幼い子供達や女性が詰めかけていた。「ちょっと物悲しくて、力強い、独特な聖歌を聴いた。ふと、高校の時の礼拝がうかぶ。つながってると思った。

宗教ってすごい。」一仁輪

午後

今日は FARUC さんの誕生日。亜希子画伯の似顔絵にメッセージを寄せたカードと、「上を向いて歩こう」の歌を贈った。とても素朴な誕生日プレゼント。

「ここでの生活はとても不思議。いつも心が落ち着いている。時間と共に空や風の音が変わっていくのを感じられて、幸せ。」一奈実子

8月31日

午前

BC 合同訪問 リキヤに乗ってボシエガオンスクールへ

「幼稚園組の授業に参加した。先生によってクラスの雰囲気はかなり違う。ダッカで行ったクラスより子供達がおとなしい。洪水の影響もあるのかもしれないが。」一麻子

「2年生のクラスで、一人年上の男の子がいた。障害を持ち、家族もいないという。NGOの保護施設から通う彼の、明るい笑顔がすごく印象的だった。」

一麻美

午後 BC 合同訪問 テケテ歩いてチャムツァスクールへ  
 校庭の水はまだかなり残っている。生徒も十数人か。一対一で相手ができるくらいだ。団扇をたたくりズム遊びや、絵本の読み聞かせ、折り紙などをした。あまりクラスに活気がない。早くたくさんの笑顔が戻ってきて欲しいと切に思った。

夜 オアスの庭に椅子を出し、夜空の下で最後の宴。ベンガル歌に、日本の歌、国籍不明の即席歌まで、たくさんのメロデーが、みんなの口から流れ出した。無垢なパワーに熱っぽい思い、涙のあとの切なさ、優しさ。歌姫の歌にコメディアンをつぶやき。色んな個性が入り乱れたこのアパール。最後の夜。



9月1日

午前 荷物をまとめ、オアスの掃除を終えた後、お世話になったスタッフと BC 合同シェアリング SEPスタッフの言葉の中から

ALBERT 「子供達に関心と笑みをもって接してくれることを、うれしく思った。みんなとは英語でのコミュニケーションとなったが、いつの日か日本語で、より深く語り合いたい。」

FARUC 「ここで得た経験を心にとどめ、どうか日本で多くの人に伝えてほしい」

RAHAJ 「洪水の影響で行けなかった学校があることは残念。でも小数だが子供達と交流できてよかった。」

AMOL 「ここに来て、一緒に生活してくれて本当にありがとう。」

ALAM 「我々スタッフは何も贈れるものは持っていません。あるのは愛だけです。」

ERIC 「これから皆でニューオアスを創っていきたいと思います。ありがとう。」

船着き場までリキヤで運んでもらい、船でダッカへ  
 行きに車で来た道は、水浸しで通れないとのことだった。水はひいたかと思えばまた溢れ出す。緑豊かなバングラの大地は大変なものを抱えている。

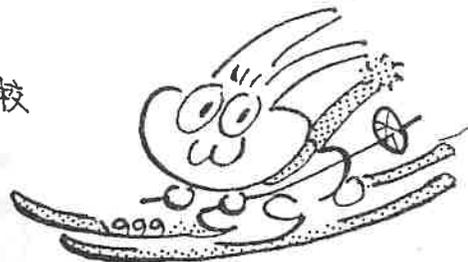
(ページ担当：井上 仁輪)

# B team IN プーバイル

（ 私たちBチームは、当初カティラに行く予定でしたが、今年は大洪水がバンクラを襲い、カティラに行くことができなくなり、Cチームと一緒にプーバイルに行きました。

## < 学校訪問 >

今年の大洪水により、プーバイル地区の学校は7校中4校が閉鎖という大変な事態になっていました。学校に行っても、来ている生徒の数は少なく洪水による被害の大きさを感じました。



プーバイルで最初に訪れたボシガオンスクールでは洪水の被害で元気かないのか子供達の反応が薄く私たちも予想していなかたので戸惑、たりしました。いつも通りにやれは子供達は元気についてきてくれると思、てしま、っていたので、その日のシェアリングでは感想や反省を言い合いました。

他の学校では、3校しかや、てい、ないため、B・C、合同訪問になりみんな、外に出、て学校の先生達も一緒に歌、たりはし、いたり。仁輪さん自作の絵本はみんなに大好評！仁輪さん自らベンガル語で読んで聞かせ、真剣にみ、ている子供達の姿も印象的でした。

## < シェアリング >

私たちBチームはシェアリングのやり方についてや、みんなにもっと自分を出してほしい、という意見をもとにシェアリングについてシェアリングすることもありました。自分を出すことにより議論をよぶことができ、より深いシェアリングができるのではないかと、いうように。それについてはそれを考えて意見を言い合、たし、色々な人がいて、色々な考え方があるから強制するものではない、あせることでもない、ではないか、という風に落ち着きました。他にも、「自分にと、てのキリスト教とはどういうものか？」ということや、洪水のことなどについてもいろいろシェアしました。

シェアリングという時間を設け、みんなと共に感想や意見を分かち合うというのは初めての経験で自分が大きくなる素晴らしいものだと感じました。

# Bチームの様子

## \* シェアリング第2弾

私たちBチームは毎晩、シェアリングが終わり、た後、"もっとお互いをよく知りあおう"をテーマにシェアリング第2弾をやっていました。1人ずつ自分の恋バナをする。意外な人の意外な面(?)も知ることができとても楽しいものとなりました。毎晩やっているうちにCチームのメンバーやアルバイトまで参加することもあり、テーマ通りお互いをよく知り合えるものになりました。

## \* Culture ShowのBチーム

Bチームの出し物はうちゅをたたいてリズムで遊ぶ、ハンド・クラッピングのようなものでした。フォーパイルにいた時から練習を積み重ね、いざ本番! 緊張していましたが、あのエツ子さんの演技も真横でみながらやっていた私は緊張を忘れ、「エツ子さんに負けない!」という思いで必死にうちゅをたたいてました。練習以上の素晴らしい演技を披露してくれたエツ子さんはスゴイ!

## Bチームの日記より

- ・神様に出会い、どんな状況であっても心が満たされていること。それが神様を信じることで与えられる恵みだと思う。(美登利)
- ・僕は今とても幸せ。毎日が本当に充実してできることなら今の生活をずっと続けていきたい。だけど、僕がこのような生活ができるのは全部スタッフとみなさんのおかげ。心から感謝しています。(厚志)
- ・同じ人なのに生まれた境遇だけでこんなにも与えられた機会がちがう事。自分にとり、常識や感じ方が他の人も同じとは限らないという事。分かっているようでやはり自分本位です。(亜希子)
- ・自分たちが歌う声だけでこんなに幸せを感じることができ、楽しい時も過ごせることも初めて経験し、すごく良かった。(契子)
- ・クラスに入ると、5列なら5列分のイスがさ、と空いてみんな「ここに座りなよ」とニコニコしてくれらること。とてもありがたくて全部に座れるように私が5人いければいいのに... と思った。(仁輪)
- ・子供たちが紙風船で楽しんでくれたのが良かった。暗い気持ちになりがちな生活の中で少しでも楽しい気持ちを持ってほしいと思った。(茂史)

## メンディが消えるころ…



中西絵津子

「バングラデシュは雨期がいい」と、写真集に書いてあった。  
「ここ十年で最悪の洪水だ」と、CNNのニュースは伝えていた。  
やがて飛行機からバングラデシュの大地が見えた。水の中に、それはあった。

ダッカの朝、目覚めると足の甲が血だらけだった。蚊とダニに刺されたのを寝ているうちに搔きくずしたらしい。殺菌スプレーをしまくったが、それでも少し膿んできた。カリタスの女性や、お料理のおばさんや村人の誰彼が「それはどうしたんだ」と聞いてくれる。「モシャ（蚊）」と答えると、「オー、モシャ～」と、みなそれぞれに気の毒そうな声を出した。

教室に子どもは数えるほどしかいないし、先生たちもいささか上の空だった。水がそこまで来て、稲も野菜も沈んでいるのだ。当然のこと。…ちょっといたたまれないような気がした。それでもオフィスを訪ねてくれた先生たちと、一緒に折り紙や歌を楽しんで、とてもいい時をもてた。

クライマックスはやはり「サリーとメンディ」だ。今回は男性メンバーも、サリーこそ着せてもらえなかったものの、メンディはしてもらった。根気よく手のひらに描いてくれる花や幾何学的な模様は、その葉の色からは想像できない鮮やかなオレンジ色だ。薄くなっていくのが悲しくて、手を洗うたび確かめた。

さらに水位が上がっていた。私たちはバングラデシュを後にした。

メンディが消えるころ、モシャのあとも目立たなくなった。日常が戻り、彼の地での思いをそのままに再現するのは、そうたやすいことではない。それでも、と思う。手のひらのメンディは消えるけれど、私たちの心のメンディは消してはならないのだと。

私は今回2度目のスタディーツアーに参加した。2年前に参加したとき、私はバングラデシュの地で自然や人々、SEPのスタッフ、そしてメンバーに出会いたくさんのことを学んだ。それはその後の日本での生活を変え、そして、私の支えとなった。しかし、時間がたつにつれその時感じたことや考えたことが薄れていき、わからなくなって行ってしまった。そんな迷いの中で、もう一度バングラデシュに行ってみよう、そうすればまた何かを得ることができるとも思えないと思った。

行くまでは、以前に行ったことがあるという思いから、バングラデシュで起こるであろうことを、頭の中で描いていた。しかし、洪水でカティラに行けなくなったことをはじめ、自分の想像していたことと違うことがたくさんあった。はじめはそれに戸惑ったが、それらを素直に受け止めてみたら実に多くのことを与えられていたことに気が付いた。バングラデシュで人々に出会ったこと、洪水で村が沈んでいたりなどバングラデシュで今起こっていることを自分自身で体験したこと、メンバーと時間を共有したことで、私は様々なことを感じていた。

ある礼拝の時、星の王子様の「かんじんなことは目に見えないんだよ」という言葉が引用された。「心で見なくちゃ、物事はよく見えない。」まさにその通りだと思った。自分の知っていることだけで周りを見ていたのでは、見える部分は狭まってしまう。それにとらわれないでいろいろなことを感じる事ができたとき、私は今まで見えなかったものが見え始めた気がした。

今、私は、再びバングラデシュを訪れることができよかったですと心から思っている。今回も大切なものをたくさん与えられた。こうしてまた少し豊かになった心で、日本で生きていくということを見直していきたいと思う。自分がどんな立場にいて、どんなことができるのか、そういうことを時間をかけて考えていきたい。そして、ACEFやバングラデシュとの出会いを大切に、忘れないでいたいと思う。これからも、大切なことを忘れないように、祈ることを忘れずに生きていきたい。



## 今、思っていること



前田 亜希子

バングラディシュに来て、目に移る景色は想像を越えており、人々のじっと見てくる視線が、なんだか私には痛く感じられてなんともいえない気持ちになった。人々は皆、今日と同じ明日を迎えることができないかもしれない状況の中で、賢明に、明るく生きている。それなのに、こんなにも与えられたチャンスに差があっているのだろうか、これが貧困の現実なのか、という思いで一杯だった。

私個人のことでは、目先のことばかりを追いかけて、何かを考える時間を全く持たなくなっていた自分に気付いた。シェアリングの時も、感じたことを言葉に表すことができなかったり、自分の感じたことを全てさらけ出すのが怖くて本当の事が言えず、差し障りのないことを言ったこともあった。これは同時に、日本での対人関係における私の悩みでもあった。

農村でのゆっくりとした生活は何かを考えるのに十分な時間であり、周りの人達のお陰ですこしづつ自分の感じたことを表せるようになっていった。そして私はあの船から見た洪水の景色を忘れない。私の大好きな街、神戸の地震もそうだったが、どうしようもない無抵抗なことがある、それは、今まで日本という特別な環境の中で暮らしている私には衝撃的だった。

聖書は自分のことが書かれているような気がして、どきっとした。私は時々自分一人の力で生きているように感じていたが、沢山の人の祈りに支えられていたのかもしれない、そう思うととても謙虚な気持ちになった。

これから一部分であるけれども見てきた事実を、冷静な頭と熱い心を持って考えていきたい。そして、大好きな友達と彼らの国のことを祈り続けていきたい。



誰にも凝視されない日本の、人ごみの中を歩いていると、ほっとする。私はここでなら、このままの私でいられると思う。ただ、それが良いか悪いかは別にして。

ダッカの空港の柵の中で、思わず、胸につけていたコサージュの蘭をむしり取った。機内で貰ったものだった。つけたまま街には入れなかった。

物乞いの子供が寄ってくる。私が手に提げた買い物袋を指差して、笑いかけてくる。ひよろりと細い腕の先で、小さな茶色い手のひらが開く。私はこわばった笑顔を返す。彼らは握手しようとする。手をつなごうとする。欲しいのはお金だけじゃないの？何を欲しているんだろう？道端で物を乞う毎日の中で、彼らは何を見つめ、何を感しているのか。ここでは、なにもかもが不足している。ではなぜ、そんなに美しい素朴な笑顔が見せられるのか。大きな、きよろきよろ動く瞳からは何も読み取れない。疑問と、“私は彼らを理解できない”という戸惑いが、心を固くさせる。そして……“私は何をしに来た？”

いつも見られていた。強い眼差しに、思わず目をそらす 外国人に対する単なる好奇心でしかないのかもしれない。でも好奇心のその先に、彼らは何を思うのだろうか。日本人である私は、彼らに何を感じさせるのだろうか。

日本の人ごみの中では、誰も私を凝視しない。誰もがみな、他人に興味など持たない。持ったとしても、凝視しない。他に好奇心を満たしてくれるものは街に溢れている。私達の目には、欲していないものまで入り込んできてうるさいくらいだ、それでも何か満たされず、気まぐれで街を彷徨えば、一時その隙間を埋めてくれるものが流れ込んで消えていく。だから隣を歩く人間が、どこから来て、何を考え、何をしてるかなんて興味を持たなくてもすむ。でもバングラではそんなものも不足している。人々は私を凝視する。私が何を考え、どんなことをしてるのか。強い瞳で見られると、全て見透かされている気分になる。私は改めねばならないことが山積みになった人間の様に、自分を見つめる。

私はバングラへ行くことに様々な理由付けをしていた。でも始まりは、“何かが欠けている”、そんな漠然とした思いだったのかもしれない。バングラで生きる人々を見る。それは同時に、人々に自分を見られることとなり、逆照射された自分を見ることになる。予想以上にハードなことだった。

あらゆるものが不足している国の人間と、ありすぎて何が不足しているのかわからなくなった国の人間と。それは対峙だったのか、需給だったのか、お互い何を見、何を見られたのだろうか。

ゆっくりとした時間の中で...

曾田茂史



ゆっくりとした時間の流れのなかで、色々なことを感じられた旅だった。  
——今回の旅を一言で表現するならばこうなるであろう。

今回のツアーは私にとって、昨年の夏に続く二回目になったわけだが、今年は激しい洪水の影響により、去年私が経験した環境とは少し違うものになった。我がBチームが行く予定だったカティラまでの道が冠水してしまったために行けなくなった上、代わりに行くこととなったブーバイルの学校も7校中4校が浸水していて訪問できないという状況だったのである。このツアーの主な活動である学校訪問ができなかったので、私達には沢山の自由な時間があり、そこで色々なことをして色々なことを感じる事ができた。

あるときは星空の下でみんなで歌を歌って楽しさを分かち合い、あるときは真剣に語り合い、お互いを思い合った。あるときは自分の弱さや小ささに悩み、自分を見失いかけた。またあるときは青く広がる空の下で、オフィスの壁の向こうから田んぼを抜けてやってくる風を心地よいと感じ、近くで遊ぶ子供たちを見てかわいいと思った。あるときはアルバイトやファルークさん、スタッフたちと触れ合い、彼らの真摯な思いややさしさを感じた。そしてあるときは自分と神様との間にあった距離が少し近づいたのを感じ、祈ることの大切さを知った。

忙しい日本の生活の中では経験することのないとてもゆっくりとした時間の流れの中でそれらの様々な出来事があり、様々なことを感じた。自分にとって苦しかった時もあったが、それでもやはり幸せを感じる事が多かった。色々なことがあり過ぎて、自分の中でも整理がついていないこともまだ残っているが、とにかく今回バングラデシュで経験してきたことは、これからも自分の宝物として心に残っていくのだろう。そしてその宝物をどう生かしていくべきか、自分なりに考えて形にしていきたい。

洪水で大変な状況の中、私達の生活を支えてくれた沢山のの人たちと、沢山のことを分かち合った仲間、そしていつも見守ってくれていた神様にとっても感謝している。



## スタディーツアーで考えたこと

矢沢契子

私はこのスタディーツアーで普段考えたことのないこと、見たことのないもの、初めて感じたことなどたくさんのすばらしい体験をすることができた。

最初の4、5日は体調を崩し皆と一緒に行動することができなかったが、その時のまわりのスタッフや皆が気遣ってくれることがとてもうれしく感じたり、見るものすべてが新鮮で日本では得られないたくさんの刺激があったことなどが印象的だった。町へ出ると物を乞う人々が私達に寄ってきたりして、どう接したらいいのかとか、バングラの貧しい現実を見るようでとても複雑な思いをしたが、学校を訪問してみれば子供達が笑顔で私達を迎えてくれ、とても強さを感じ、一生懸命生きているんだなと思った。私がバングラに来て一つ後悔したのが、バングラについてもっと勉強してくれば良かったということである。母や兄からの勧めで軽い気持ちで行くことを決めた私は、バングラについての本もろくに読まず、言葉もほとんど覚えないうままバングラへ行ってしまったのだ。私をもっと本を読んだり言葉を覚えたりしていれば、もっといろんなことを考えたり感じたりできたかもしれないし、人々ともっとコミュニケーションがとれたかもしれない。そう考えるととても残念に思う。

この他にもダッカや農村、学校でたくさんのことを経験できたのだが、私が特に心に残ったことは毎晩みんなでやったシェアリングである。初めのうちは、皆の前で話すこと自体に抵抗があり緊張して自分が何を話せばいいか考えるだけで、皆の話を聞けない状態だったが、回を重ねるごとに慣れてきてとても楽しい時を過ごすことができた。皆が何を考えているのかを聞くことができ、新しい発見や共感することなどがあり、とてもためになった。そして毎日お祈りすることや、神様について話し合うことで、神様をとても近くに感じることは初めてのことで、とても幸せを感じた。

この思いや、バングラで生活する中で考えたことなどは、日本に帰るとすぐに忘れてしまいそうなことだけれども、めったに経験することのできないものを得たのだから、これからの日本の生活でもバングラで感じた心を忘れずに生きていきたいと思う。

## ありがとう

山藤 厚志

ブーパイルに向かう車の中から見た景色はとても衝撃的でした。田んぼは水没しており、たくさんの家が屋根のすぐそばまで水につかっていたいました。そして、車が止まるたびに、「タカー」とお金を求める人がやってきました。『僕はここに何をしにきたのか。救済活動をしにきたわけでなく、自分自身のためにやってきたわけで、こんなに大変な時に、こっちの人々は観光で来ている僕達外国人のことをどう思うのだろう』と複雑な思いがありました。

しかし、スタッフやブーパイルの人々は本当に温かかったです。一緒に何かをしている時もすごく楽しそうに見え、僕も本当に楽しかったです。

シェアリングの時間に、一人のスタッフがいった話を聞きました。彼は、「みなさんが幸せを感じるにより、私たちも幸せを感じる」とっていました。

それを聞いてからは本当に楽しみました。楽しすぎて昼寝をするのがもったいなく思い、ベンチに一人で座っている時がありました。そこからはいろんな物が見えました。まわりに広がる自然、青い空、夕食を作っているおばさん、遊んでいる子供たち。いろんな物を見ているだけで、たくさんのことを感じ取ることができました。

Bangladesh は発展途上の国、洪水が多い国と日本人はマイナスのイメージが強いと思います。僕も実際に行くまではそうでした。確かにそうかもしれませんが、僕は Bangladesh という国を好きになりました。だから、たくさんの人にこのツアーで経験したこと、学んだことを話そうと思います。そして、少しでも多くの人に Bangladesh に対するマイナスのイメージを減らしてもらいたいと思います。

これからは、もっと多くの Bangladesh についての知識をつけ、もう一度 Bangladesh に行くことを目標に頑張ろうと思います。

最後にこのような貴重な経験をさせてくれた、ACEFの先生方、SEPのスタッフ、チームのみなさん、両親、学校の先生方、Bangladeshの人達、全ての方々に感謝します。そして、Bangladeshの地に「ありがとう。」



# Cチーム in PUBAIL

## ・ 8月26日 チャムダ'スクール 訪問 (Cチームのみ)

プーバイルにて初の学校訪問。みんなの大女子な「ともだち」の歌を歌いながら、れんが造りののどかな道を近所の子どもたちと一緒に歩いて行く。

学校に着くと前日に対面した先生たちが笑顔で迎えてくれた。しかし、子供たちの顔に笑顔はなく、ダカのと看のように、うまく子供となじめず、みな悪戦苦闘。しかも出席率が非常に悪い。プーバイルの子供たちは一体どうしたのだろうか。—— (しかし、それも、これも、



「洪水」の件でははいか」という結論に達する。洪水で「行きたくても、学校に行けない子」がいて、そんな時に例え学校に来られても、ニコニコ笑っている状況ではいづからだろうか。

## ・ 8月28日 洪水の被害地区へ

舟に乗って初めて「洪水」というものを目の当たりにする。水につかった学校を見ると胸が痛んだが、洪水前の風景を戻らない和達には、この洪水によって、どんなに大きな被害を受けたか、やはり、はまりとはわからなかった。



— Cチームの舟が途中いきなり大揺れした。その時、上に3人乗っていたが、下の人たちは、上の3人が「はしゃいでいるもの」と思った。しかし、実は、電線がもうすぐそこで、それをよけるために、3人いっぺんに腹ばいになった。

たのだった。そんな高い所まで水位は上がっていたのだ。

## ・ 8月29日 プーバイルスクールへ (B.と合同)

Cチームの乗り合いバスの車中で、アラムさんは、また日本語の勉強を始めた。すると、「おれに〜のりこさん〜くたさいる」車内は一気に笑いの渦に。

8月31日 ボシガオンスクールへ (B.C.合同)

Cチームのメンバーは、この時初めてリキシャに乗った。奥にヨリモ、かなりスリルがあって、怖いものであった。私達が「ヤーヤー」言て怖がっていると、リキシャワラーは喜んでスピードを上げたり、他のリキシャと競争したりと、恐ろしい行動力に出た。しかし中には、私達よりも年も体も小さい少年が一生懸命運転するリキシャもあり、乗っているのが本当に申し訳なかった。

まゆちゃん「折り紙マシーンになる!!」

★ Cチーム “バチの歌” を披露する ★

♪ ユラが1本ありました。あーおい南の空の下、

チャムツダスクールへ (B.C.合同)

Cチームとしては、この学校は2度目の訪問となったが、前回ヨリモ、学校の近くまで水が上からきていることに驚いた。不変変わらず子供たちに笑い声はなかったが、折り紙を教えると、一生懸命子供してくれて、とてもうれしかった。

Officeへの帰り道、先生たちも一緒に帰宅した。先生たちに、もう一生会えないのではないかと思って、悲しくなった。私達とていして、年が変わらないけれど、女性としての貫録があり、とても光輝いて見えた。またいつか会えることを信じていた。

かなちゃん「HONDA (ホンダ) に乗る!!」

## Sharing

Cチームのシェアリングは毎日とても、内容の濃いものだった。シェアリングは、自分の生き方を問い直す、本当によりチャンスになった。

～メンバーの声～

「心にたまっていたことを、言葉に出してサテラ、苦しんでいたことが、スッキリした。自分の心の閉塞は解決したわけではないけど、少しづつほっとしてきた感じ。」

「sharingでは毎回興味深い話になる。でも考えれば考えるほどわからなくなり、穿たせてもらう。答えは見つかるのか。『人間は考えるアツてある』人生をかけて、その答えを探していけば、正しいのかもわからない。」

### 《最後に》

今回Cチームのメンバーは、またバングラデシュは初めてでした。その分、色々エピソードも大きかった。うまくいかない面も多かった。しかし、そんなネガティブを克服し、しっかりと明るく、温かみを見守り、受けとめてくれた、チームリーダーのリ子さんに、本当に心から感謝します。

## SEP始まって初めての大水

井上 義子

「星の王子さま」の中に、「これが、ぼくにとっては、この世の中で一番美しくって、一番悲しい風景です。王子さまが、この地球の上に姿を見せて、それからまた、姿を消したのはここなのです。」という一文があります。誰が見ても何も感じることなく、通り過ぎてしまう景色であっても、ある人にとっては、かけがえのない景色となることがあります。「一番美しくって、一番悲しい景色」それは、私にとってはプーバイルのハルバイド村にあるのです。そこで起こったこと、出会ったことが私の人生を変え、私の心の中でいつまでも鮮明に生き続け、今の私を変えているからです。その切ない思いのする美しい景色が、今年は一面水に覆われていました。

プーバイルにあるSEP寺子屋7校のうち4校は校舎が水に浸かっているというので、すぐスタッフ2人と共にボートで視察に行きました。バングラデシュは3毛作のため、毎年雨季の田んぼは、田植えをしたばかりの「黄緑色」と、稲が伸びて青田になった「緑色」と、稲穂が垂れて刈り入れをまつ「黄色」が一面に入り交じって、それはそれは美しい風景です。その水の中。その上を私ったのです。これはました。いつもは、またはテクテクと歩行くというのですか月以上水に浸かったで、竹壁はどんどん口ボロです。これで室として使いものになりません。すぐに修理をしなくては。その間子どもたちはどうするのでしょうか。



美しい田んぼが全部はボートに乗って行大変なことだと思いいりキシヤに乗って、いていく学校に舟でら。どの校舎も1ヶ状態が続いているの痛んで上の方までボは、水が引いても教

学校に行く機会に恵まれなかった子どもたちに教育の場が与えられ、新しい校舎も建って、テープカットをした喜びの日が思い出されました。子どもたちの歓声と、きらきら輝く目にあふれた教室が目の前に浮かびます。しかしそれが今は、洪水のため学校にも来られず、それぞれのパラ（親族と一緒に住む集落）から出られないでいるのです。（水で囲まれているため。）学校のあるパラから出る時に、水の混ざった粘土の泥道を、サンダルを泥土にとられながら歩く私のそばに一緒について歩き、私のサンダルを水で洗って、足の泥も流してくれた子どもたち。洪水のため食べ物が手に入りやすく、困難な状況にありながら笑顔で見送ってくれた子どもたち。何ともさびしい気持ちとつらい気持ちが交差して、私は一人ボートの端に座り、SEPのスタッフに背を向けて泣きました。

一日も早く校舎を修理し、勉強できる喜びを取り戻すことができるよう、できる限りの応援をしたいと思います。

先日、ファーストフードの店に座っていたら、ある光景に目が止まった。一組の親子。向かい合っているながらも全く会話をせずに、ただ黙々と目の前にある食べ物を口に入れていた。無表情だった。無機質だった。とても悲しくなった。

私はこの社会とは全く違う環境に2週間いた。バングラデシュ特にプーパイルの村においては私はただの無力の一日本人にしかすぎなかった。しかし、自分の無力に気付いた時私は私に関わる全ての人、スタッフ、ツアーメンバー、村の人々そして食べ物、水、草花一本一本までもかけがえのないとても大切な存在に思えた。そしてそれらの人、ものによって生かされている自分自身にこのうえない喜びを感じた。生きていることがただとても嬉しかった。

日本とバングラデシュは全く違う環境だが、人が生きていくうえでどちらも厳しい環境だと思う。それでもリキシャーをこぐ少年の背中はずきましくて、現実の厳しさから逃げず立ち向かっていた。今を生きていた。私もこの少年のように地に足をつけて今を生きたい。



バングラディッシュの子供達との触れ合いは、私にとって、今まで感じたことのないような、強い心の揺れをもたらしました。英語の話せない子供達とのコミュニケーションに、はじめはとても不安を感じました。でも、お互いにぎゅっと手を握りあい、目を見つめ合うと、そこに言葉はなくても何か通じ合っている、という確かな感触をつかめたのでした。その手の暖かさ、目の輝きは、私の心に大きな安らぎを与えてくれました。

バングラディッシュの子供達は、何もないところからいろいろな遊びを生み出し、また、友達を本当に大切にしています。子供に限らず、バングラディッシュでは、人と人との深いつながりを強く感じました。それらは、私が日本で忘れかけていたことを思い起こさせてくれるようでした。

天災、貧困、教育の問題など、バングラディッシュは多くの困難を抱えています。でも、彼らは自国の自然を愛し、ベンガル人としてのアイデンティティをもち、自国に誇りをもって生きているのです。「Bangladesh is beautiful. Is Japan beautiful, too?」と、片言の英語で問いかけてきた少年の言葉が忘れられません。私は、その時、自分の日本に対しての思いや、日本人としての自覚の曖昧さにはっとしました。私は日本を美しとは思いませんでした。しかしそれは、日本の美しい、大切な部分に目を背けている自分があるからだ、ということに気が付きました。どんな国にもマイナスな面はあります。でも、その国を支え、原動力となり、よりよい国をつくりあげていくのは、国民の愛国心なのではないでしょうか。バングラディッシュの人達は、私達に大切なことを教えてくれました。それを具体化していくことが、これからの私の課題なのです。





## Bangladeshとの出会い

坂本 奈実子

私にとって、Bangladeshで過ごした2週間は忘れられないものとなりました。今こうして日本にいてBangladeshでの生活を振り返ると、とても大切な時間を過ごしていたのだと実感してしまいます。そしてこのツアーを支えてくれた多くの人々に感謝の気持ちでいっぱいです。

このツアーで印象深いのは、やはりプーバイルでの1週間です。ここではみんなと話したり、歌ったり、遊んだりして心身共にリラックスした時を送る事ができました。なかでも、Bangladeshの人々と触れあえたことが何よりも嬉しかったです。子供たちと一緒に手をつないで歌いながら歩いたことや、いろいろな家を訪問したことや、学校の先生たちと楽しく笑いあえたことなど、数え挙げたらきりがなくらい沢山の思い出があります。それと、日が暮れてゆくを感じながら生活できたというのもとても良かったです。時間の流れがゆっくりとしているのだけれど、不思議と長くは感じませんでした。

それからショックだったことは、洪水の被害です。洪水というものを目にしたのが初めてだったので、あの様なまるで大きな川みたいところが実は水田なんだとは信じられないような気もしましたが、実際に半分以上水に浸かっている家や木、稲などの風景をみて、洪水の脅威を感じずにはいられませんでした。

この2週間というのとはにかぐ人と深く関わる事が多く、私も多くの人々と出会うことによって様々な影響を受けました。特に、Bangladeshの人々とは言葉を使って充分には話せなかったけれど、彼らときちんと向き合ってお互いの存在を認識しあえたような気がします。彼らをどこまで理解できたかは分からないけれど、でも私は彼らと同じ時間を共有し、それが今の私にとってとても大切なものになっています。人と人が接することによって生じてくるものが、これほどまでに大きなものだという事を私は自分の体験を通して知ることになりました。このツアーで得たことをこれからどのように活かしていくか、それが今後の私の課題です。

バングラの生活がこれもの”

中村 麻子



この2週間のバングラディッシュでの生活は、  
私にとって本当に大きな恵みを与えてくれた。

日本で生活する中で、ひどい悶々と考えていた向題に  
対して、解決の糸口を与えられることもあったし、  
また、今まで、気がまもしなかったようなことに、実際に  
出逢うことで、気がまき、そして、また私の中に新しい  
向題が芽生えたり。日本の生活の中で、私は

本当に誰からも信じ、愛があるというところ、できなく  
なってしまう、自分が生きているというところに幸せを感じられ  
なくなり、そんな自分が悲しくてたまらなくなった。

タッカでも自分の 妻に対してひどく凶んだりもした。

グローバルで、散歩をしていた時、私は牛の群をみると

「はなはな、どういふ、足、汚い、」と、その足に

思っていた時は、その家の女性が、私を水のある場所へ

連れていってくれ、足に水をかけてくれた。私は壁に叩き、

自分の手を落とす、落とすと、その女性や、その彼女の手に

私の足に、水をまいてくれた。私は正直

驚いた。どうして、水をまいてくれるのか、どうして、

持たせてくれたのか、その時、あんなに、人の愛、

ものをもらった。人間、素晴らしいなあ、って、漠然と

思った。生きるって、いいなあ、人、って、いいなあ、

そんな、あたり前のことを、私は、あんなに、一歩、

行った仲間、妻に、教えてもらった。 31



## 前田華奈



バングラデシュでは、毎日がとても新鮮でした。まず、聖書、賛美歌の本を開くということから私にとっては初めてのことでした。そしてバングラデシュでも10年ぶりという360度水の洪水。それにもめげず生活している人たち。遊びに行ったらMakeをしてくれた村の人。教室では怖い、しかし私といくつも年の違わない寺子屋の先生。SEPのスタッフや、もちろんチームのメンバーなど、たくさんの人との出会い。

また、バングラデシュへ行く途中、バンコクで1泊したので、日本・バンコク・ダッカ・プーバイルと、同じアジアといっても物質的にも、精神的にも差があるということを感じました。プーバイルからダッカに戻ってきたときはなぜか日本とよりもカルチャーショックを受けました。人の雰囲気の違いや町の様子、騒音など、とても同じ国と思えず、驚きました。

私は日本にいないとき、深刻な悩みがあったわけでも、今までの生活にたいした不満があったわけでもありません。このツアーに参加し、バングラへ行くことを決めたのは、ただどこか（どうせなら普通に行かないような所）に行きたいというだけでした。

バングラデシュにいる間ずっと、洪水で食べ物も減ってきている今のここに、私は何のために、何をしに来たのかということが頭の中で回っていました。しかし答えはできませんでした。今は言葉で言えるものではない何かをバングラでもらってきたと私は思うことにしています。

プーバイルでの生活は洪水がひどかったこともあったせい、時間がとてもゆっくり流れていました。私ははじめ、時間ももったいないとばかり思って、一人での外出は禁止されていたのに、こっそりオフィスを抜け出して木に登り、スタッフの人に世話をやかせてしまったこともありました。今はその時ののんびりしていた時間がなつかしいです。しかしそれは、2週間という限られた時間だったから、大切でも貴重でもあり、毎日が新鮮でもあったと思います。慣れてしまったプーバイルの人にとっては日本以上に単調な生活なのかもしれません。

しかし私は、だんだんのんびりとしたバングラの、プーバイルの空気にとけ込んでいった気がします。そんなとき、私は「素」の自分になっていました。日本にいたときのように自分を作るということが日にちが経つにつれ、どんどんなくなっていきました。それには、自分の言いたいことが何でも言えたシェアリングのおかげということもありました。とくに、プーバイルへ行ってからのシェアリングは、話す人の数も減ったのでますます私は言いたい放題でした。それでもチームのメンバーはきっちり話を聞いてくれて、うれしかったです。初めて会ったばかりの人たちの前で、なぜあんなに話すことができたのか、不思議です。

最後に、バングラデシュでの多くの出会いの中で思ったのは、やはり言葉が通じるということの大切さです。人と人とのコミュニケーションに言葉はいらないと聞いたことがありますが、私はすぐ限界を感じてしまいました。もっと話したい。私は今高校1年なので、3年後にもっと英語を勉強してもう一度バングラを訪れたいです。

# 大洪水!!

## ~私たちが見た洪水報告~

今年の夏にバングラデシュを襲った洪水は、後に今世紀最悪と報道される程の大規模なものだった。私たちは洪水の最中のバングラデシュに滞在することになり、そこでの体験はもはや洪水なくして語ることはできない。私たちの受けた衝撃を多くの人たちと共有するために、実際に私たちが目にした光景や体験などを報告したい。



### <飛行機からの眺め>

着陸直前に目にしたのは、ほぼ水浸しになっているバングラデシュの国土。予想以上に水で溢れていて、これから始まるツアーへの不安がよぎる。

### <カティラ>

カティラに通じる道路が冠水により通行不可能になってしまったため、カティラ行きは断念せざるを得なかった。



### <農村-ダッカ往復>

プーバルへの往路は、冠水した道路を避けて遠回りをしたが、途中何度かスタッフが車から降りて水の中を安全に誘導してくれた。復路は道路が遮断されたため、リキシャと舟を乗り継いでダッカへ入り、車で宿舎へ戻った。ダッカの舟着き場は多くの人で騒然となっており、洪水による混乱を肌で感じた。ジャマルプールでは、ダッカ向かう電車の切符の入手に苦勞した。



### <ボートトリップ>

舟に乗っているとまるで川のようなが、稲穂の先や家、電柱の上部のみが川面から見えることで洪水の被害を痛感した。また、気を付けないと電線に引っ掛かりそうになったこともある。高い土地がぼつりと残っていて、まるで離れ小島のようなようだった。



### <ダッカ>

市内を移動の際に、避難してきた人たちが長い列を作って食料の配給を待つ姿を見かけた。また、宿舎の近くに洪水の避難所があり、そこは学校の様な所で一階が宿泊になっていて、外で自炊している様だった。薬や注射も扱っていて、大人は少しピリピリしている様子であった。

# プーバイルの寺子屋が あぶない話

私たちがプーバイルに滞在していた時、寺子屋全7校の内4校は洪水の被害で閉鎖していた。残りの3校も水が近くまで迫っているようであったし、ボートトリップで訪れた閉鎖校は校舎の痛みがひどい状況であった。そして、私たちの帰国後には全7校が閉鎖となってしまった。水が引いた時点で、校舎に被害のない3校は間もなく再開できるだろうが、他の4校は校舎の修理をしないと学校再開は困難である。



ボートトリップで閉鎖中の所を訪問。水は引いていたが、壁などの痛みがひどかった。10月には修理を始めたい。



## ナラヤンクールスクール

ボートトリップで近くまで行ったが、水位が高すぎてボートから降りられずに遠くから見たのみ。校舎の上部まで浸水していたようだ。



## ポタハルバイドスクール

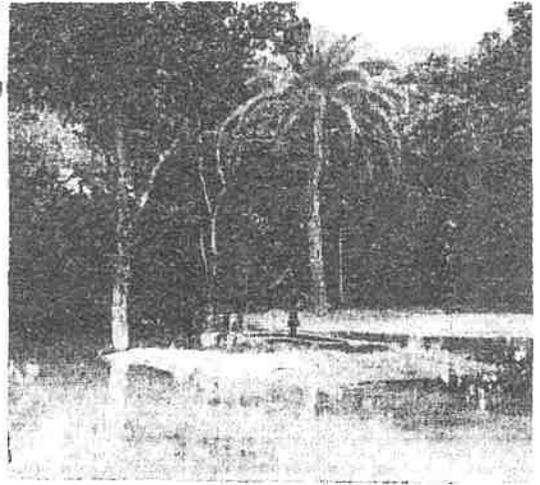
唯一訪問した儀子さんによると、ハルバイド村自体が水浸しになっていて、子供たちが登校できないし、左の写真から分かる様に、校舎も浸水していて使用できない状態だったようだ。毎年の洪水では被害のない所だけに、ショックである。





## チャムツダスクール

Bチームは1回、Cチームは2回ずつ訪問できて、先生たちとも交流のあった学校。校舎自体は大丈夫だったが、校舎が水浸しで、右の写真から分かる通り、井戸にも水が迫っていた。子供の数が少なくて、結局学級閉鎖となってしまったようだ。



## ボシュガオンスクール

BとC合同で訪問した。校舎、校庭ともに被害を免れていた唯一の学校であったが、川や線路を超えて登校することのできない子供たちが多く、学級閉鎖になった。

3m盛り土をして造った新しい学校というだけあって校舎は無事であったが、周囲は3mの水深という事態になってしまった。BとCと一緒に訪問できたが、やはり学級閉鎖とならざるを得なかったようだ。

## プーバイルスクール

## シヨモシンスクール

ボートトリップの時に訪問した。舟から降りてすぐの所に学校があり、ひざ下の深さの水の中をジャブジャブと歩いて校舎へ近づいた。勿論校舎は痛んでいたし、井戸の中にも水が入っていたので、その井戸はもう使うことができなくなってしまった。

# 全体シェアリング

農村から戻った翌日のメンバー全体でのシェアリングを  
テーマごとにまとめました。

## Bangladeshの人々、そして自分…

- 仕事に対する人々の喜び、プライドを感じた。
- 働いている子どもたちの素晴らしい笑顔に、生きるたくましさ、力強さを見た。
- なにげない生活感覚にちがいがあり、それを共有するのは難しいと思った。
- 仕事に誇りを持ち、一日一日懸命に生きる人々の姿を見た。自分にはないものをいっぱいもらった。
- 日本にいたら持て余すような時間を楽しく穏やかに過ごせた。精神的に豊かな人々だと感じた。
- 多くの人に支えられて生きていることを感じた。壁の前で逃げてばかりの自分だったけれど、これからは前に進んでいける気がする。
- 自分のおかれている環境がいかに恵まれているかを知った。それを生かしていきたい。
- 日本人であることをこれまで意識していなかった。自分は日本人なのだと改めて感じた。
- 日本を伝えるという役割を果たすには、自国の文化をもっと吸収しておくべきだと思った。
- ここで困難に立ち向かっている人々と出会い、私だって乗り越えていかなければいけない、恵まれたチャンスをむだにしてはいけないのだと思った。

## 交わりの時、シェアリング

- 時間にゆとりがあって、ゆったりと考え、話し合う時間をもてて幸せだった。
- スタッフやメンバーといろいろな話ができ楽しかった。やさしくて温かい人たちとの別れはつらいけれど、いろいろな感謝している。
- 2グループが合同になったこともあり、いろいろな人がいて大きなものを得た。
- 皆と話し、ふだん考えないことを考え、視野を広げることができたと思う。

- シェアリングで皆が自分の意見をとことん喋ってくれて、自分もいろいろ話すことができ、気が楽になった。
- 自然発生的なシェアリングが多くもたれ、心を開いて互いに思いやり、成長できた。

## 農村での生活、そして洪水

- 子どもといっはい遊んだ。「何かしてあげたい」という意識を持っていたが、「与えられた」一週間だった。
- 鳥をさばくのを見、料理の女性たちといろいろ交流し、食事一つにも心から感謝することを知った。
- 洪水の中で、自然と戦いながら生きているのだということをあらためて知った。
- 洪水の現実をこの目で見た以上、日本でできることをやらなければならないと思う。
- スタッフは私たちの食糧確保に苦勞していた。食料不足は深刻だった。
- 被害を受けた学校を見てショックだった。教育は途中でストップすることはできない。日本でどうやって訴えていくか、考えている。

## 二回目、三回目のスタディーツアー

- なぜまた参加したのかを考え続けている。それでもとにかく、たくさんの愛を受けてダッカに帰ってこられた。
- 二つの組織が共に何かをやっていくむずかしさを感じた。
- 二年前に見た子どもが勉強を続けていた。ゆるやかな進歩を感じ、確かめることができた。
- 二回目で、固まりすぎていて見えなかったことに気づかされた。
- はじめの頃、二回目のあせりもあり一回目の人たちに自分を押しつけてしまった。回数に関係なく、皆それぞれに感じる力をすごく持っているのだとわかった。

## キリスト教

- 祈りや聖書に初めて取り組み、最初は抵抗があったが祈るのは特別なことではないとわかった。これからも周りの人のことを考えて祈る時間をもっていきたい。
- 私の中でのキリスト教の存在が大きくなった。
- 神さまを信じて生きていこうという、強い気持ちをもてた。

## 編集後記

編集委員になったことで、ツアー以来会っていなかった友達と話す機会がもてました。編集を進めていく中で、バングラデシュの人々や風景を懐かしく感じると同時に、今もそこで懸命に生きている人々のことを思い、自分もしっかり生きよう、頑張ろうと励まされました。

鈴木桃子

初めは大変そうで面倒だなと正直思いましたが、別のグループの人達と話したり、少しずつ薄らいでしまいそうだったバングラデシュのことを改めて思い起こし、考える機会をもてたので、とてもよかったです。

谷口聡美

誰もが、「報告書」で心を言葉にすることに苦労したと思います。書ききれなかったこと、書けなかったこともあるかもしれません。様々な思いは、様々な形で、今後も温められていくことを願います。

井上仁輪

いろんなことを文字にして伝えるのはスゴク難しかったです。でも文章を書いていると、バングラで経験したいろいろなことを思い出すことができ、自然と笑顔になれました。この思い出を忘れずに日本での生活に活かしていきたいです。

矢沢契子

帰国後に耳にするバングラデシュ関連のニュースが他人事とは思えず、とても敏感になっていることに我ながら驚いた。何事においても交流によって生まれる人と人との繋がりが根本にある大切なものだと実感した。

坂本奈実子

編集の仕事をやったことで、日本に帰ってからどんどん薄れていったバングラデシュの思い出や、そこで学んだたくさんの大切なものが、また少しずつ心によみがえってきました。

穂坂裕美

## 第15回スタディーツアー報告書

1998年12月発行

## 第15回ACEFスタディーツアー参加者名簿('98夏)

### Aチーム (ジャマルプール地区)

- 1 船<sup>ふねとよ</sup>上<sup>したか</sup>良<sup>りょう</sup>隆<sup>りゅう</sup> 359-1132所沢市松が丘1-20-2 042-925-4685 ACEF事務局長
- 2 矢<sup>や</sup>澤<sup>ざわ</sup> 励<sup>れい</sup>太<sup>た</sup> 181-0011三鷹市井口4-14-28 高田荘7号 0422-32-0968 ICU4年キリスト教学
- 3 藤<sup>ふじ</sup>田<sup>た</sup>ひ<sup>ひろ</sup>ろ<sup>み</sup>美<sup>み</sup> 239-0813横須賀市鴨居3-29-17 0468-42-2986 東京女子大3年文理哲学
- 4 高<sup>たか</sup>橋<sup>はし</sup> 絵<sup>え</sup>美<sup>み</sup> 177-0053練馬区関町南2-25-44-202 03-3929-1643 東京女子大3年現文言語文化
- 5 鈴<sup>すず</sup>木<sup>き</sup> 桃<sup>もも</sup>子<sup>こ</sup> 352-0015新座市池田3-3-8 048-477-0166 東洋英和女大3年人間科
- 6 植<sup>うえ</sup>村<sup>むら</sup> 朋<sup>とも</sup>子<sup>こ</sup> 210-0848川崎市川崎区京町2-24-6-204 044-333-9177 東京女子大2年現文コミュニケーション
- 7 谷<sup>たに</sup>口<sup>ぐち</sup> 聡<sup>さとみ</sup>美<sup>み</sup> 277-0856柏市新富町1-14-13 0471-46-0876 青山学院短大1年教養
- 8 高<sup>たか</sup>崎<sup>さき</sup> 哲<sup>とし</sup> 203-0052東久留米市幸町1-2-17 0424-75-1940

### Bチーム (カティラ地区)

- 1 中<sup>なか</sup>西<sup>にし</sup> 絵<sup>え</sup>津<sup>つ</sup>子<sup>こ</sup> 368-0072秩父郡横瀬町横瀬7463-9 0494-24-6364 児童文芸家協会
- 2 三<sup>み</sup>上<sup>かみ</sup> 美<sup>み</sup>登<sup>どり</sup>利<sup>り</sup> 121-0814足立区六月1-12-2 03-3850-8365 東京女子大3年現文地域文化
- 3 前<sup>まえ</sup>田<sup>た</sup> 亜<sup>あ</sup>希<sup>き</sup>子<sup>こ</sup> 274-0818船橋市緑台1-3-4-301 0474-48-5867 東京女子大3年文理公共経済
- 4 井<sup>いの</sup>上<sup>うえ</sup> 仁<sup>に</sup>輪<sup>りん</sup> 357-0038飯能市仲町20-15 0429-72-1692 東京女子大2年文理日本文学
- 5 曾<sup>そ</sup>田<sup>た</sup> 茂<sup>しげ</sup>史<sup>ふみ</sup> 203-0023東久留米市南沢1-4-45 0424-71-9192 自由学園最高学部2年
- 6 矢<sup>や</sup>沢<sup>ざわ</sup> 契<sup>けい</sup>子<sup>こ</sup> 236-0032横浜市金沢区六浦町185-2-B 040-635-7176 関東学院大1年英米文
- 7 工<sup>く</sup>藤<sup>どう</sup> 厚<sup>あつ</sup>志<sup>し</sup> 030-0861青森市長嶋2-8-6 0177-73-1133 東奥義塾高2年理系

### Cチーム (ブーバイル地区)

- 1 井<sup>いの</sup>上<sup>うえ</sup> 儀<sup>り</sup>子<sup>こ</sup> 331-0042大宮市奈良町97-46 048-668-2942 ACEF事務局
- 2 吉<sup>よし</sup>田<sup>だ</sup> 麻<sup>ま</sup>美<sup>み</sup> 181-0015三鷹市大沢2-9-15ウイックス三鷹101 0422-34-0724 ICU2年教養国際関係
- 3 穂<sup>ほ</sup>坂<sup>さか</sup> 裕<sup>ひろ</sup>美<sup>み</sup> 330-0834大宮市天沼町1-63 048-644-5971 東京女子大3年現文地域文化
- 4 坂<sup>さか</sup>本<sup>かも</sup> 奈<sup>な</sup>美<sup>み</sup>子<sup>こ</sup> 362-0042上尾市谷津2-1-1-A110 048-774-8216 東京女子大3年現文言語文化
- 5 中<sup>なか</sup>村<sup>むら</sup> 麻<sup>あさ</sup>子<sup>こ</sup> 249-0005逗子市桜山2-7-14 0468-73-7942 青山学院短大2年児童教育
- 6 三<sup>み</sup>上<sup>かみ</sup> 加<sup>か</sup>菜<sup>な</sup> 036-8063弘前市宮園4-3-1県営住宅2-1-2 0177-33-5974 東奥義塾高1年Bコース
- 7 前<sup>まえ</sup>田<sup>た</sup> 華<sup>か</sup>奈<sup>な</sup> 470-3235愛知県知多郡美浜町野間畑中3-2 0569-87-2703 県立熱田高校1年

< バソグラデシュユに寺子屋を贈ろう >

- ☆ ACEFの会員になりましょう
  - ・団体会費：年額1口 50,000円
  - ・個人会費：年額1口 5,000円
  - ・学生会費：年額1口 2,000円
  
- ☆ ACEFに献金しましょう
  - ・クリスマス献金（金額は自由です）
  - ・一時寄付金（年間いつでも結構です）
  
- ☆ アルミ缶回収と献金にご協力ください（年間いつでも結構です）
- ☆ 使用済みテレカ回収にご協力ください（年間いつでも結構です）

郵便振替 00100-0-185540

アジアキリスト教教育基金

〒169 東京都新宿区西早稲田2-3-18-26

TEL.& FAX 03-3208-1925